

全国痴呆症高齢者グループホーム研究交流フォーラム'98

小さいことはいいことだ



採録・鼎談『グループホームの意義と期待される役割』のポイント

主に行政の支援や介護保険との関係について、現役の厚生省課長の登場ということで注目も集まりましたが、なかなかわかりにくい点多かったのではないのでしょうか。介護報酬がどうなるかなど、「これからが本番」というところなのでしょう。

供給者の論理から消費者の論理へ

辻哲夫(厚生省大臣官房政策課長) パネルディスカッションの議論を聞いて、非常に感銘を受けた。それは、住民に必要なことから始め、積み重ねた結果、やっているということだ。こういうものだからこそ地域に受け入れられるのだろう。「制度が先にありき」ではない。どうしたら、こういうものが日本中に満ちあふれるようになるのかと考えた。

浅野史郎(宮城県知事) グループホームはいろいろなことを示唆している。これまでは、サービスでも何でも、供給者側の論理が過ぎていた。サービスを消費する消費者の思いがないがしろにされてきた。宅老所はそれに対するアンチテーゼであり、供給者側の論理から消費者の論理に変える、いわば「革命」だ。

宅老所でスタッフを募集すると、人がたくさん集まるだろう。こういうことをやりたい、という人はたくさんいる。やむにやまれぬ心の動き、抑えれば抑ええるほど燃えていく恋に似ている。消費者が求めていただけでなく、供給者側のニーズにも合っている。行政はじゃまをしてはいけない。

グループホームをスクスク育てるには

浅野 宅老所は行政側からみれば「産まれたばかりのいい子ども」。これからはスクスク育つ段階だが、支援は難しい。なぜかという、グループホームはつかみどころがない。行政にとって慣れていないからだ。行政は初めてのことに過剰にやりすぎてしまう。

グループホームは、NPO(非営利民間法人)と似ている。NPO法ができて、NPO法人が生まれると、行政は支援したくなる。しかし、NPOのある関係者はこう行っていた。「一番いい支援は情報をくれること。どこにいけば、どういふNPOがあるかという情報が一番ほしい。NPOに直接お金を出すのはやめてください」

NPOを選ぶのはお客さんである市民だ。市民がNPOを鍛え、市民が寄付という形でお金を出したほうがゆくゆくはよいのではないか。このNPOをグループホームに置き換えてもよい。市民の目によって市民が選ぶ。行政はどんな支援をするか、よく考えて知恵を出していきたい。

辻 宅老所のいいところと制度をどうすりあわせたいか考えている。介護保険では、いままでの固定経費払いから出来高払いになる。医療保険の診療報酬と同じ仕組みになるが、法人格さえクリアすれば、保険のほうがお金はうまく回っていくはずだ。問題は、立ち上がりをどう支援するか。立ち上がりを支援する助成があってもいいのではないか。

浅野 国は補助金を出さないほうがいい。厚生省は補助金官庁を抜け出すべき。その代わり地方分権の時代なのだからお金は、どんどん県に下さい。どこに補助すべきかは、県か市町村が考えればいい。

介護保険と宅老所、グループホーム

辻 「デイ、ショートは法人格のないものではないのか。デイだけのところは法人格がとれないという厚生省の指導があるのか」という質問状を栃木県の人からいただいたが、現在、デイサービスでは、小規模のD型と痴呆老人毎日通所のE型は「地域住民等」というかたちで、認められている。厚生省は、デイだけでは法人格がとれないという指導はしていない。

介護保険制度では、グループホームも保険を受けるのは法人格が必要。ない場合は償還払いとなり、利用者が10割を負担してあとで9割を払い戻されるという仕組みになるが、問題だと思う。利用者の負担が過大にならないように、介護切符(ノウチャー)を使うなどの方法を検討中だ。なぜ法人格がいるかという、出来高払いになるので、経営の安定性を見通せるところでなければならないからだ。同時に、介護保険で経営が安定するよう、介護報酬も工夫しなければならない。

大熊(みやぎ夢大使・朝日新聞論説委員) いいお世話をしている宅老所は「痴呆にみえない」「お世話しているようにみえない」。介護をしてよくなったら、保険給付も下がるのではないか。

辻 技術的には悩ましい。自立して介護が軽くなった場合、これだけ経費がかかったということ算定して、加算するというやり方なら考えられる。報酬で「いいケア」に対する評価はできないが、客が選択するというで評価される。お年寄りの笑顔を高く評価してほしいという意見もだが、「笑顔を評価する」のは地域だ。

宅老所をどう位置づける?

浅野 歴史的にみれば、施設は必要悪、もしくはいまの時代だけの産物にすぎない。施設があって宅老所が付け足しであるのではなく、宅老所、グループホームのほうが主流なのだ。グループホームが大規模施設を動かすことになる。宅老所の「託する」でなく自宅の「宅」。このことが象徴している。宅老所はできるだけでできた。将来世の中を席巻するものと期待している。

大熊 グループホームに関してはデンマークとスウェーデンでいつも議論があった。デンマークでは施設がいいと言い、スウェーデンはグループホームがいいと言っていた。今、デンマークでは施設を限りなく家に近づけ、スウェーデンでは、ボツボツとあったグループホームをグループ化して、両者は限りなく近づきつつある。

しかし、北欧の施設になくて日本の宅老所にあるものがある。北欧の施設では、お年寄りにお茶を出していただいたことはないが、日本ではお年寄りからお茶を出していただいたし、それだけでなくくれと面倒もみてくれる。宅老所では、お年寄りがホストであり、主人公であるということだ。そういう宅老所が日本で生まれ、育とうとしている――

「全国グループホーム巡り」

2月28日 20:00

8時から10時半までの超ハードな夜が始まった。夕食後の自主参加となっていたプログラムであったが用意した500の席がほぼ満員、参加者の熱気に夕食のビールも加勢して会場のなかは汗ばむほどだった。昼に紹介のできなかった9ヶ所が、持ち時間15分を駆使しての笑いあり、涙ありの2時間半となる。進行をつとめたのは宮城県の子葉宇京さんと仙台市の秀嶋善雄さんの高齢者政策担当の両課長。鼎談のなかで、壇上の浅野県知事か

最初は、デイセンターみさとの田部井康夫さんが15年の実績をおおいに語り、続いて、胃ガンの手術後にもかかわらず会場にかけつけてくれたパワフルな澤向裕子さんは「袖の家」セカンドの代表者である。会場を笑いにつつんだ元気な亀さんの滝本信吉さん。「介護保険に関係なくいままでどおりにやっていく」とインパクトの強い言葉も飛び出しました。小規模多機能施設の老舗であることぶき園の槻谷和夫さんは、5分でまことに明瞭簡潔。グループホームは非営利団体のみでやるべきと考える。「小さいことはいいことだ」は「小さければすべて良い」ということではないのだと、中身の伴わないグループホームの危険性を指摘しました。

飛び入り参加で、笠岡市よりクロッカールゴードン基金の表彰対象者の推薦の願いが行われました。秋に笠岡で予定されているグループホーム国際サミットで表彰される6名の推薦です。審査をするのは宮城宅老連ときのこエスポワール病院佐々木さん、笠岡市、スティナ・クララ ヒュルストローム基金会長などです。単に施設長だからとか、長く務めているだけの職員などはご遠慮願いたいとのこと。女(男)神のようなあなた、詳しくは会場で配

られた笠岡市の資料、「小さいことはいいことだ」の110ページをご覧ください。

さて、ヤモリクラブの朝倉義子さんの風呂の話。生活は利用者が決めるの姿勢は崩れません。憩いの家まごの手の澤井茂吉さんは、長い特養経験の末に宅老所を始めました。演出効果の点で会場を席卷したのは山形のあべさん家の阿部昭典さん。さだまさしの曲にのせて繰り出すスライドは会場の涙をさそいました。アノばん

いいケアをすると白髪頭に黒い毛が生えてくるという嬉しい報告は「こもれびの家」の蓬田隆子さん。アザレアンさなだ・大庭の家の宮嶋渡さんは、特養の行うグループホームのあり方を示し、アンチ施設ではなく、今ある施設をどう変革していくのかと問いかけました。

すべての発表が終わり、進行役の子葉さんの「この2時間半で帰った人は17人。入ってきた人は20人。熱気の溢れる会でした」の言葉を最後に、大盛況の内に松島の夜は更けていきました。

会の終了後、会場に残り話し合いを始めるグループがいくつもありました。ホテルのロビーやラウンジ、和食の店のなかにも情報交換や交流を楽しむ姿が見られました。このフォーラムをきっかけに新たなネットワークが生まれ、さまざまな実践が広がっていく予感がします。



事務局から 昨夜でまとめた速報3号。終わってホッと一息、と思ったら今日はもうひとつの目玉「大分散会」。うん、会場のあの熱気を感じるとうかうか寝てなどいられません。20もある分散会、テーマが一纏とはいえ、ああ、あそここの会の展開だと思って聞きたいの……と思っているあなた、ご安心ください。それぞれの分散会の様子は、速報4号でばっちりお知らせします。

今日のこの催しが、全国にある宅老所、グループホームなど地域でお年寄りを支えていくという「小さな」ホームのゆるやかなネットワークにつながればいいなと思います。

そのあたりのことも含めた速報4号は3月8日1100発行。郵送でお手元にお届けする予定です。お楽しみに！ 天気は下り坂のようです。気をつけてお帰ってください。おつかれさまでした。